



PROLOGUE

うつすらと仄かな光の気配を感じて、ゆっくりと目を覚めました。
鳥の声がどこともなく聞こえはじめ、朝を知覚する。

「ふ……っ……ん！」

布団の中で大きく伸びをする。ちよつとまだ気怠い感じ。

布団の暖かさが、とても恋しい。

三月。

目覚まし時計は、まだその役目を果たす前らしく、ただ静かに時を刻んでいた。

「ふ！」

気合いを入れて、上半身を起こす。

目覚まし時計のアラーム、OFF!

「ふぁ！」

だが、まだ寒い。

けど負けない！

決心して、布団から出る。

「ふあああああ……」

寒さに負けて身体がくじけそうになるが、トイレに行けという脳の指令が飛んできて、布団に戻るのを諦めた。

朝、六時。月夜つきよの起床である。



KAREIDOMEMENTOS

一、派生ワールド

朝、起きたらすることは決まっている。

神社の掃除をして、それから野良猫たちの世話。

あと一応、お賽銭さいせんの回収……とは言え、あんまり入っていない。

それでもこのお賽銭はちあらが生きていくために必要なものである。

「あ……」

もう一つ残っていた。

それはおみくじの処分。

様々な思いが乗ったおみくじは、あまり長いこと放置しておくのは良くない。良い思いも、悪い思いも、皆まとめて浄化する。

「……」

とはいえ、今はもうちあらに浄化の力はないが……。

「ふ……！」

「くっ……!!」

「んんっ……!!」

「ふあ!」

かつては出来ていた、浄化。

その時のことを思いだして、いろいろやってみるのだが……おみくじには何も変化がない。

「ふう……」

諦めて、ちあらはおみくじをあきら社務所しゃむしょの中に持っていく。

囲炉裏いろりの中で燃やしてしまうのである。

「おみくじはふわりと囲炉裏の炎を受け入れると、右に左にうねりながらも、身を焦がしていった。」

これで果たして浄化できているのかどうか……ちあらは自信がなかったが、今はこれしか方法が解らない。

掃除が終わったら、朝食を作る。

冷凍しておいたご飯を解凍して、お湯で戻すお味噌汁に、昨日の夜の残りのブリ大根。ブリはお供えにいただいたものだった。

「いただき……ます……」

誰もいなくても、手を合わせて朝食をいただく。

わずかなお賽銭とお供えに感謝する気持ちを忘れてはいけない。

一口目を口に運ぼうとしたとき、カリカリと窓をひっかく音が聞こえてきた。

「ん……」

いつもの合図である。

ちあらはいったん台所に戻ると、昨日の夜にいただいたブリの骨を軟らかく煮たものと玄米を持って、縁側に出た。

そこには五、六匹の猫が行儀良く座っていた。

「おまたせ」

ちあらは持って来た手作りの猫飯ねこめしを縁側の上に置いてやった。

この辺の野良猫たちである。

暖かな日差しを受けて、猫たちはめいめいに朝食を食べ出した。

「黒ぶち、茶ぶち、みけこ、白はな、黒しっぱ……」

ちあらは模様もようの特徴をそのまま呼び名にしていた。怪我はしてないか、どこか様子がおかしくないか名前を呼びながら確認する。

「ぬ」

「う……」

突然、目の前に短足でお腹がぼっこりと出た黒猫——と思われる——がちあらの前に現れた。あまりの突然の登場に、ちあらは身構えてしまう。

「ここにも餌場えさばがあったんだぬ。知らなかったぬ」

その猫は感心したように、うんうんとうなづく。

この黒い猫がテトメトだという名前だということは、ちあらも知っていた。そして、飼い主がいることも。

「いつも野良猫の面倒を見てくれて、嬉しいぬ」

目の前のずんぐりむっくりの猫は、そう言うと、ぺこりと頭を下げた。

「ん……いつものことだから」

「ありがたいぬ」

「あなたも欲しいの？」

「心配には及ばないぬ。吾われは自分で食べていけるぬ」

「そう……」

「ただ、その茶色のブチのあとをつけてみたら、ここにたどり着いただけぬ」

「あとを？」

「そうぬ、ウチでも野良猫の面倒をみてるんだぬ。そしたら、その茶色のブチが食べ終わると早々にいなくなったので気になっていたぬ」

テトメトのその説明で、ちあらはいろいろなことが合点がいった。

最近減った猫たちは、テトメトの餌場に行ったのだ。そしてこの茶色のブチはちあら餌場

にもハシゴしていたということ。

ちあらは、ホツとした。

「じゃあ、鼻が黒の……」

「うちに食べに来てるぬ」

「黒い靴下を履いた……」

「それもいるぬ」

「お腹が白い茶トラの……」

「いるぬいるぬ」

ちあらは最近見かけなくなった猫の特徴を言うと、テトメトが嬉しそうに頷いた。

「よかった……」

「どうやら吾がお客さんをとってしまったようだぬ」

「ううん、無事なのが解れば、充分。それにわたしよりあなたの方が猫の事はわかりそう」

「吾は猫だからぬ！」

テトメトが鼻息を荒くする。

それにもう一つホツとすることがあった。それは家計のことである。わずかなお賽銭とお供えだけで暮らしているちあらにとって、猫の餌を用意するのはけっこう大変だったのだ。

「わたしもご飯食べないと……」

学校にも行かないといけないし、あまり猫の餌やりに時間をとられているわけにもいかない。
と……。

しゃがんでいた身体を起こすと、目の前に神社の拝殿はいでんが目に入った。

その拝殿の奥には本殿ほんでんがある。

「……………」

見たからといって、特に何も感じない。

のだが……………」

かつては、この本殿が怖かった記憶がある。

なぜ怖かったのか……………」

それは思い出せない。

とにかく、今は何も感じない。

「あそこには、もう何もいないぬ」

「え？」

「この神社は今、何も奉られてないぬ。強いて言えば……………主ぬしが奉られる対象かもしれないぬ」

「わたしは、神じゃない」

「知ってるぬ。人間ぬ」

人間。

そう、自分は人間。

しのばずほうらい
不忍蓬莱学園一年生、月夜野ちあら。

でも、なんだろう。

この違和感。

この落ち着きのない感じ。

「朝ご飯たべなくていいのかぬ？」

「あ、食べる……」

でも、もうお味噌汁とか冷えてるかも……なんてことも同時に思う。

そんなちあらをテトメトは優しく見送った。

* * *

放課後、部室の扉を開けると、相変わらずの言い合う声が飛び出してきた。

「こっちの方が絶対いいって！」

「えー!? でも部長は校章に近い赤がイイって……」

「部長だけの意見を聞くわけにはいかないじゃない」

なにやら揉めて^もいるが、まあ、いつものことではある。

「あら、ちあら」

「やほー」

しかし二人はちあらを見つけると先程までの言い争いはどこへやら、笑顔で手を振ってきた。
「にぎやか……」

言い合いをしていたのは、こなみとななみである。双子の姉妹で、ちあらの一つ先輩だ。

そしてこの二人はいつも言い合いをしている気がする。仲がいいのか、悪いのか……。

「……」

ちあらはしばし、二人を見つめた。

この二人が並んでいるのを見ると、何故かちあらはしっくりこない。でも、それが何でなのかは解らなかつた。

「なんか来週、陸上部の試合の応援を頼まれたらしいんだ。それで、チアっぽい衣装をすることにしたんだけど、ベースの色がなかなか決まらなくて」

やれやれとため息交じりに言い合いの状況を教えてくれたのは、十和子だ。

十和子の身長が高いので、ちあらはぐいーっと顔を上げる。

「私は別にどっちでもイイから、二人の結論を待ってるところなんだ」

そしてクスクスと笑って、二人へ視線を移す。

「ふむ……」

ちあらもこなみとななみがそれぞれ持っているチアの衣装を見た。

赤系と緑系で揉めているようだった。

「わたしも応援に行くの？」

賽の目くら^{さいめ}ブとして応援を依頼されたのなら、当然ちあらも行かなければならない。

「もちろんちあらにも行ってもらうけど、ちあらは巫女の恰好^{かっこう}でお願いね」

「みこ……」

「その方が選手が燃えるんだって」

「もえる……」

「んー？　なんか漢字違う気がするなあ……」

そこへ十和子の声が割って入った。

「へ、漢字？」

「燃える、じゃなくて、萌える、な気がするよ？」

「なんの話よ？」

「いやまあ、わかんないならいいんだけど……」

「わかんないわよ！　ちゃんと説明しなさいよ、十和子」

「う……うまく説明は出来ないんだ……」

「なんでよ!？」

「だって、その……萌えるってなんかこうフワツとしてて、ほよつとしてて……よく解らないんだもん」

「あのね……」

「あ、桜織さおりなら、説明できると思うよ!？」

「そもそも萌えなる言葉を十和子に教えたのは桜織である。」

「そういえば桜織はまだ来てないのね……サイズ合わせしたいのに」

「桜織のサイズなら私が知ってるよ!」

「え、十和子が?」

「桜織のことなら任せてよ。身長や体重に留まらず、バスト・ウエスト・ヒップにカップの大きさまで、なんでも知ってるよ!」

「「……………」」

その場にいた、こなみ、ななみ、ちあらの目が点になる。

「あ、あれ?」

「桜織と十和子の関係ってほんと謎よね」

こなみが両手の平を上に向けると、ため息をついた。

「時々思うんだけど、十和子と桜織って、デキてるの?」

ななみはずいっと十和子の顔をのぞき込む。

「えっ!? デキてるって? お、女の子同士で赤ちゃんはできないと思うけど……」

十和子はびっくりしてオドオドする。

「……………」

また三人の目が点になる。

「十和子の片思いでしょ? 桜織が十和子のことを恋愛対象にしてるとは思えない!」

「コク」

こなみの言葉にちあらも同意。

「う、事実だけど、そうハッキリと否定されるとちよつと悲しいような……」

十和子が泣きそうになる。

「十和子ってレスなの?」

「えっ!? ち、ちがうよ。私はただ桜織が理想の女性像というか、なんて言うか……だから桜織のどんなことでもしつかり頭にたたき込んでるんだよ」

「ストーカー?」

「がーん!」

なんだか不毛な会話だ、とちあらは思った。

なにせ……。

「ん、どうしたのちあらさん?」

ちあらが十和子のことをジロジロ見る。

「十和子は充分良いプロポーションをしていると思う」

モデルのように高い身長。

すらっと伸びる足。

バランスの良い腰の位置と、くびれ。

そして大きな乳房。

「桜織の真似まねなんかしなくても、魅力的だと思う」

「えー、そうかなあ……」

「ま、十和子の場合、その性格に難有りってところじゃないかしら？」

こなみが呆れる。

「ええ!？」

「もうちょっと自信持っていていいと思うし、男嫌いも問題かなー。桜織を見習うなら、身体じゃなくて性格の方をもっと勉強した方がいいわよ？」

「せ、性格かー。でも私、桜織ほど頭良くないし、なんでもテキパキできないし……」

「あー、そうそう、そのトロいのも何とかした方がいいかもね」

「うう……がんばるよ……」

そもそも、十和子は十和子であって、別に桜織になる必要はないのに、とちあらは思った。

「ごきげんよう」

そこへまるでタイミングを見計らったかのように桜織が部室に入ってきた。

「あ、桜織！」

十和子の超反応。

十和子の耳は誰よりも桜織の声を聞き分けるようだ。

その嬉しそうな表情は、今にも桜織の胸に飛び込んでいきそうな勢いを感じる。まるで御主人様の帰りを待っていた愛犬のようにも見える。

「なんつーか、十和子は桜織のパートナーって言うよりは、ペットって感じよね」

その様子を見て、こなみは笑いを抑えきれない。

「なんの話です？」

状況を理解してない桜織は、首をかしげるしかなかった。

「まあまあ、そんなことより桜織、サイズ測はからせてもらうわよ」
こなみがメジャーを手取る。

「ああ、陸上部ですね。お願いします」

「さ、サイズなら私が……！」

十和子も慌あわててメジャーをつかもうとするが……。

「いえ、こなみをお願いします」

バツサリと十和子の申し出を切り捨てた。

「はう！」

「そう？ 別に十和子がやるんならそれでもいいけど？」

と、ななみは手を引つ込めるが……。

「十和子にやらせたら何をされるか……」

「あうあう……」

「あ、そういうこと……」

「別にサイズ測るぐらい……」

特に何も起きようがないと思うけど、と続けようとしたななみだが、それを桜織がきつぱりと遮った。

「パンツずらして指を入れるくらいはしてくるでしょうね」

「なにその痴漢行為！」

「そ、そんなことしないよお」

「だいたい指入れて何の意味が……？」

「さー、十和子のことですから、ちっあつ膣圧でも測るんじゃないかしら？」

「ち、ちっあつ……桜織の!? ゴ、ゴクリ……」

「」「」……「」「」

今度は四人の目が点になる。

「はっ!? ち、ちがうよ! そんなつもりなんてないよ! ひどいよ桜織! 桜織の勝手な妄想じゃないか」

「まーでも十和子ならやりそう……」

「ええ、こなみさんまで!」

「だって今、興味持ったでしょう?」

こなみがまるで軽蔑するような視線を送った。

「うわわ、そ、そんなことないよ。で、でも、桜織の……桜織の……うわ……」

興味は持たなかったとしても、今のこなみの言葉で想像はしてしまったようだ。

「さおりの……さおりの……ぶっ!」

「あ、十和子!」

十和子は鼻血を吹いて、倒れてしまった。

「もー、どんだけ頭の中がピンク色なのよ」

「ま、それだけ桜織が女性から見ても魅力的って事ではあると思うけどね」

「夢を見すぎですよ」

桜織はそういうとさっさと制服を脱ぎはじめた。

「あら、夢見させてあげなさいよ。清楚で、勉強も出来て、指導力も抜群の生徒会長。クスク

ス、いったい何人の男子生徒が脳内で桜織をレイプしたのやら……」

「……………」

残ったななみ、桜織、ちあらの目が点になる。

「頭の中で考えてることは、十和子よりお姉ちゃんの方がゲスよねー」

「なーに言ってるのよ、頭ん中が一番ゲスなのは桜織でしょ」

「ま、それは否定しません」

ななみにバストを測られながら、桜織はしれっと答えた。

「次のコミーで出そうと思ってるのも輪姦りんかん腹ボテものですし」

「うわぁ……」

「桜織、恐ろしい子」

「それをアシするこっちの身にもなつてよね、もー」

「あ、ちあらが固まってるわ……」

「会話にうまくついていけなかった……」

部室に入らずと下ネタが続いている。

ちあらにとつては刺激が強すぎたようだった。

輪姦腹ボテ……と言われても、イマイチ頭の中で状況が展開できない。

まあ、展開できなくていいのだが……。

「それよりも色はいいの？」

いつの間にか下ネタへとずれた会話を、当初のチアの衣装に戻す。

今話し合うべきことは、下ネタではなく、衣装の色だ。

「ま、ちあらの巫女が紅だから、それに合わせるか、それともメリハリをつけるために変えるかって感じじゃない？」

こなみはちあらの両肩をつかんで、自分の前に寄せると、そういった。

「なるほど、さすがはこなみですね。議論の持っていき方を示すなんて」

言い合いなんかせずに、最初からそう言えばいいのに……と、ちあらは少し思った。そうすればななみと言い合いなんかしなくても済むのに……。

「なるほど」

ななみも腕を組んで感心する。

「統一か、メリハリか」

「私はどっちでもいいよ？」

いつの間にか復活した十和子の答えは変わらないようだった。

「桜織は？」

「違う色の方が面白そうですね。最もその場合、ちあらが真ん中に来ると思いますけれど」

ちあらの巫女の紅とそれ以外になるのだから、当然ちあらが一番目立つ存在となる。

「え……」

「あー、そか。色違いにすれば、おの自ずと並びも決まって便利ね」

「あ、えーと、同じ色がいいと思う……」

と言いかけたちあらだが。

「じゃあ、色をわけましょうか」

という方向に話が進んでしまった。

「ちあらが中心となるとー」

そして他の四人がちあらを取り囲んで、陣形を組む。

「あ……あの……」

「ちょうど巫女が中心になって、いいかも。身長差もこれで気にならなくなるし」

今まで赤を推おしていたななみもあっさりどこなみたちに同調してしまった。

「……」

ちあららの意見が入る余地はどこにもなかった。

二、メモントリーク

夕方、下校のチャイムが生徒たちの気を急⁺く。なんとなく校舎の中が慌ただしくなった。

「あれー、もう下校時刻か……」

十和子が伸びをしながら、ミシンを止めて立ち上がった。

「どれくらい進んだー？」

「こなみができあがった衣装を持ち上げる。

「まだこなみさんとななみさんの分しか縫えてないよ……」

「結構かかっているわねー」

「でも二人はサイズがほとんど一緒だから、助かったよ」

「ま、双子だからね」

「大会は来週ですから、まだ時間はありますよ」

「あ、うん」

「けど、ダンスの練習もしないとじゃない？」

「それは別に衣装を着なくてもいいじゃないですか」

「そう？ 本番の衣装着てないと、なんか色々狂ったりしない？」

「何が狂うのです、何が」

「わかかんないけど、調子とか」

「大丈夫だと思いますよ」

「そか」

あっさり納得。

「んじゃ、帰ろうか」

「待って待って、まだ帰る準備できてない！」

「トロいわねー、十和子は」

「ええ!? 私にだけミシン掛けさせといて、それはないよお」

「それもそうだったわね」

などと会話が進んで行くうちに、めいめいの帰り支度が済んでいく。

が、ちあらだけ、一人、まだ本を読んでいた。

「こら！」

「あ……」

こなみがちあらの本を取り上げる。

「チャイム、聞こえなかったの？」

「ん……」

聞こえてはいた。

が、読んでいる本のキリが悪かったというのもある。

「先に帰って。準備、時間かかりそうだから」

ちあらはそういうと、椅子いすから降りて自分のカバンへと駆け寄った。

「わかったわ。ま、ちあらちあらの神社はウチと同じで、学校からはそんなに離れてないもんね」

「コク」

「じゃあ、また明日ね」

「お先ー」

「皆さん、ごきげんよう」

「またね」

「また、あした」

ちあらのか細い声を最後に、部室が急に静かになる。

「……」

同時に今まで気にならなかった音が、克明になる。

校庭から聞こえてくる運動部の音。

廊下を誰かが歩く音。

外の通りの音。

そして……。

時計の音。

ちあらはゆつくりと窓の方を振り返ると、壁にかけられている振り子時計を見上げた。

木製の古くて大仰な振り子時計。

かなりの年代物のようで、木の表面はよく磨かれていて、木目がなんとも言えないツヤを放っている。

この時計はこなみによって持ち込まれたものであるが、しかしちあららの記憶は少し違っていた。そしてこの時計がただの時計でないことも。

ただ、正しい記憶はこなみが持つて来た、ということとは解っている。

「んんー……」

背伸びをしても時計のある場所には、ちあららの身長では届かない。

椅子を引っ張ってくる。

「んしょ……」

椅子の上に立つ。

背伸びをして、手を伸ばせば、時計の針になんとか手が届く……かも……？

と思ったら、振り子までしか届かなかった。

十和子が羨ましい……と、ちよつと思う。

「むう……」

届かないと解ったところで、時計への興味がすっと落っこちるようになってしまった。

ただ、秒針の音だけが……規則正しく鳴り続ける。

「帰ろう……」

読んでいた本をカバンに入れて、カバンを背負う。

忘れ物がないか、ぐるーりと見渡して確認。うん、大丈夫。

部室の中は相変わらず時計の音は続いている。

気になる。

耳の奥底にまで響いてくる秒針の音。けど、届かないし、自分ではどうすることも出来ない。

ちあらは少し後ろ髪引かれる思いを残しながら、部室の扉を開けたときだった。

カチリという音がしたと同時に、ちあらの後ろで振り子時計が鳴り始めた。

ポーンというお決まりの音ではなく、チャイムを連続したような、少し高い音だった。

それが部室全体に広がっていく。

ちあらの開けた扉を通して、部室の外へも時計の音が抜け出していく。

それから少し遅れて、学校のチャイムが鳴った。

ああ、部室の時計は少し進んでいるのだな、とちあらは思った。

「ぬ」

「……………」

と、同時にちあらの目の前に見覚えのある猫らしきものが現れた。

驚いて思わず後ずさりする。

「時計をあわせに来たぬ。部室がまだ開いていてよかったぬー」

「……………」

ちあらは何が何だかわからなくて、返す言葉も見つからなかった。

「この時計の貸し出した者だぬ」

そう言いながらテトメトはずけずけと部室に入ると、びよんと飛び上がり、時計の文字盤の前で静止した。

浮いているのだ。

が、そのことにちあらは特段驚きはしなかった。

ただ……………」

かつては自分も同じような能力ちからがあった……………はずなのだ。

しかしその記憶もなんだかおかしい。

というのも、自分の今までの記憶を振り返ってみても、そんな能力など使ったこともないし、使い方すらも解らないからだ。

けれど、頭の片隅のどこかで、かつて自分は様々なものを感じ取り、その感じ取れたものど対話できたような気がするのだ。

人が心の中にしまっている悲しい思いや、憎悪、喜びの気持ち。

木々や動物が感じる、感情的なもの。

自然の力。

道具や造形物に込められた魂のようなもの。

死者の残した思念。

人間ではない意識を持った何か。

この空間に漂う^{ただよ}あらゆるものを感じ取ることが出来たはずなのだ。

「ん……」

そえば目の前で浮いているあの猫のようなものも、「人間ではない意識を持った何か」ではあるな、とちあらは思った。

そう思って改めて、テトメトを見上げる。

テトメトはその短い手で文字盤を開けて、中をいじくっているようだった。

「あ……」

ふと見ると、テトメトの身体を支えている何か、うつつすらとちあらには見えた。なんだろう？

何かは解らないが、それがテトメトを浮かせている秘密なのだということは何となく解る。

「むむむ……」

ちあらはいろいろ思案したあげく……。

「ほむー」

ぼんと手を打ち、掃除用具入れをあけて箒ほうきを取り出した。

そしてそのうつすらと見える何か——風の精霊である——を箒でつついてみた。

「ふにゃああ!!」

するとうつすらとした何かは、ちあらに自分が見えることに驚いたのか、一瞬、かき乱され、見えなくなる。と、同時にテトメトがバランスを崩して落っこちそうになった。

「ほむー!」

ちあらは興味深そうに、もう見えなくなつたうつすらとした何かのあつたあとを、箒でぐるぐるとかき回した。

が……その後は特になにも起きなかつた。

「何をしているぬ!」

テトメトは相変わらず宙に浮いている。

「この辺に、何か、いた……」

ちあらは再び箒でぐるぐると、うつすらとしたものがいたあたりをかき回した。

「……………」

テトメトには自分が使役した風の精霊が見えているため、ちあらがかき回した辺りに風の精霊が自分の足場を作っていたことが解っていた。今はちよつと別の場所に移動している。

風の精霊は別に箒でかき乱されたところでなんてことはないが、ちあらに自分のことが見えているという自覚がなかったため、驚いてしまい、テトメトを落としそうになったのである。

「おもしろいぬ。まさか、力が残っているとはぬ」

テトメトは最後の歯車の交換を終えると、静かに文字盤を閉め、フワフワと降りてきた。

「月夜野ちあら。主は……」

テトメトはちあらを見上げて、目を細めると——いや、この猫はいつも目は細めているようにしか見えないのだが——ちあらの姿が他の次元にうつすらと漏れていることに気付いた。

「ちがった、これは黒翼様のミスだぬ」

分岐してしまった世界をマージするときに、ちあらの力を適切に折りたたんだはずだった。

しかし、世界のマージにはちあらの力も利用した。おそらくそれが何かに影響したようだった。

「？」

しかし当のちあらは何のことか解らず、首をかしげる。

「もしくは巫女としての何かが作用しているかもしれないぬ」

時間や空間をどうこうするという能力は黒翼固有のもの。テトメトができるわけではない。

なのでちあらを観察しても、導き出せる答はすべてテトメトの予想でしかなかった。

「わたし……」

そこでようやく、ちあらが口を開いた。

「？」

「あなたと同じようなこと……出来ていたような気がする……」

「そういう記憶があるのだね？」

「コク」

ちあらは表情は、テトメトにはその能力を欲しているように見えた。

「その記憶は忘れ去りたいかぬ？ それとも……取り戻したいかぬ？」

「あ……！」

ちあらはすぐにも、取り戻したいと答えようとした。

が……。

「答えは、今すぐじゃないほうがいいぬ。今日は、帰るぬ」

「……」

勢いを削^そがれてしゅんとするちあら。

顔を上げたときには、テトメトの姿はなかった。

* * *

神社に戻る前に須賀橋交番を訪ね、神社宛の荷物が届いてないかを確認する。おまわりさんは小包を一つ、ちあらに手渡してくれた。

神社に戻ったら軽く参道を掃除して、それからしばらくは社務所の窓口に座る。

とはいえ、すでに夕方の一七時を過ぎており、参拝客が来ることなどほとんどないのだが……巫女としての勤めは果たさなければならぬ。

三月に入って、陽はすこし長くなっただけでも、一七時も過ぎれば暗くなるのは早い。

「あ……」

そういえば、交番に届いていた荷物は、中身は何だろう。

差し出し人の覧を見ると神社の保存会からの荷物だった。

社務所ではぱつと開封すると、LED電球が五つ入っていた。

「おー、今流行の、LEDー！」

拝殿の明かりと、灯笼とうろうの明かり、それから社務所の窓口の明かりは白熱電球だ。

「いそいそ……」

ちらあは脚立を倉庫からとってきてみると、それぞれの電球を交換した。

明かりをつけようとしていたところだったのでちょうど良い。

「スイッチ、おん！」

ぱち、ぱち、と神社の明かりのスイッチを入れると……。

「はうわー」

どうやら電球色のとそうでないのがあったようだ。

もう一度やりなおし。

電球色のものを拝殿と灯籠に、蛍光色のものを社務所の窓口に取り付け直した。

「うんむ」

絶対の自信あり。

「スイッチ、おん！」

もう一度スイッチをいれると、今度はちゃんと思い通りの光になった。

それからまた社務所の窓口に座る。

結局やってきた参拝者は保育園帰りとみられる親子だけだった。

一九時近くになると、ちらほらと猫たちが集まりはじめる。

「あ、こら」

待つのに退屈しはじめた猫たちがおみくじの棒にじゃれついたり、転がっているペンをオモチャにし始めたりと落ち着きがなくなってくる。

そろそろ晩御飯の時間だ。

「ん」

ちあらは社務所の受付の電気を消すと、猫たちを引き連れて台所へ。猫たちがちあらはの腰紐にじゃれつきながら、ついていく。

冷蔵庫の中は……。

納豆なっとうとエノキと椎茸しいたけと野菜類、豆類。庭でとれた紫蘇しそとニラとモロヘイヤ。

魚は朝のブリで終わってしまった。

肉はない。

「むむむ……」

猫が好きそうなものがあまりない。

『ちあらー!?!』

すると、外から聞き覚えのある声が響いてきた。

慌そわてて草履ぞうりをつっかけると、参道へ出る。

「あ、いたいた」

ちあらの名を呼んだのは、こなみだった。ななみも一緒だ。

この二人が並んでいるところは、やはりいつ見ても違和感がある……と、ちあらは思った。

「ん、どしたの？ あたしの顔になんかついてる？」

「なにも」

ちあらは首を振ると、頭の中の違和感を振り払った。

「夕食のおかず、作り過ぎちゃったの。お裾分けしようと思って」

そう言っただけなのにタツパーを取り出して、ちあらに渡した。

「あ、ありがと……」

まだタツパーは暖かった。

中は、肉じゃがだ。

夕食の定番かもしれない。

「それから、アラももってきたわよ」

こんどはこなみが、魚の粗あらが入った袋を渡してくれる。

「ありがと……」

これで猫も満足するに違いない。

「生だから、すぐに処理してね」

「コク」

骨が心配なので、煮てやろうなどと頭の中で思う。

匂かいを嗅かぎつけたのだろうか？ いつの間にか野良猫たちがちあらあしもとの足許に集まっていた。

「ふふ、どうやら待ちきれないようね」

その猫たちを見て、こなみはクスクスと笑った。

「あ、えと……お茶でも……」

ただ受け取ってはいさようなら、というのもなんだか悪い。

「んー、じゃあいただいちゃおうかしら」

「そうするー」

「ん、こつち……」

ちあらは社務所の裏手に二人を通した。

そして、ヤカンに水を入れてお湯を沸かす。電気ポットなどというものはないのである。

それから二人を座らせておいて、自分と猫の晩御飯の用意もしつつ……。

お湯が沸いたら、お茶を入れる。

「なんか悪いわね……」

部屋中をあちこちと動き回るちあらを目で追いながら、こなみが謝った。

「大丈夫……」

一通りこなしてから、ちあらもコタツの前に座り、茶を啜る。

「ふう……」

そして一息。

「ちあらん家ってなんかいつ来ても面白いわよね」

こなみが少し興奮気味に室内をキョロキョロと見渡す。

「もう、はしたない」

「えー、だってー」

とはいえ、見た目は普通の家とそう変わらない。

木造の。

ただ壁に掛かっているものは普通の家にはないものがある。

祭具に賞状に額に入れられた写真。写っているのは古そうな人ばかりで、どれも白黒写真だ。

ちあらの祖父祖母とかなのだろうか？

とにかくなんだかとても昭和な感じ。

とは言え、三人とも昭和という時代を知っているわけではないが……。

「なんか、おばあちゃん家みたい」

「それは言えてるかも」

こたつの上に乗っているお茶請けがまさに、それを象徴していた。

みかん……はいいとして、お煎餅せんべいにおまんじゅうにらくがん、おこしこんぺいとうに金平糖……。しかも

何故かクッキーの缶々に入っている。

「ちあらはおばあちゃんか？」

こなみが雷おこしを一つ拝借する。

「お供え物だから」

「あー、なるほどね。お供えする人って、年配の人だもんね」

「コク」

「本当はお餅系が欲しい……けど、傷むの早いから、お供えされることあまりない」

「もち米好きよねー、ちあらは」

「コク」

「もち米は神様の食べ物だもんね、ちあららしくていいじゃない」

「へー、そうなんだ？」

「別にわたしは神様じゃ……」

「ま、それはそうだけど、ハレの日に巫女はつきものなんだしさ」

「ハレってなーに？」

「お祝い事とか神様への儀礼とか儀式とか、そういう特別なことよ」

「ふーん……」

ななみは解ったような解らないような生返事を返した。絶対解ってないなど、こなみは心の中であれる。

「こんど賽の目クラブで餅つきでもする？」

「それいいわねえ」

「餅つき……!!」

「白と杵、どうすんの？」

「町内会で毎年やってるんだから、借りられると思うわよ」

「あ、そうか」

「でも運ぶの大変……」

「そうねー、賽の目には女子しかいないからねえ……」

「ん……」

こなみのその言葉にも、ちあらは違和感を憶える。

賽の目クラブには男子生徒が一人、いたはずなのだ……。

だが記憶を振り返ってみると、賽の目クラブに男子がいたことなど、一度もない。こなみとななみが発起し、そこにちあらが入り、十和子と桜織が逃げ込んできた。最初から男子はいない。

「餅つき器って手もあるわよ」

「へー、そんなのあるんだ？」

「機械はそんなに大きくないし、簡単だし」

「お餅……！」

どうやら、ちあらにとつて、お餅が食べられれば、その過程はどうでもいいらしい。「はいはい、わかったわかった。来週は陸上部の応援だから、そのあとね」

「コクコク」

お餅が待っているなら、巫女の姿で踊りでも何でもしよう、ちあらは心に誓った。

三、ワールドオーバーライド

外はすっかり暗くなり、交換したばかりのLEDの光がいつそう目立つ。

「ウフフ、ちあらは知らないかもしれないけど、あたしたち小さい頃、この神社でもよく遊んでたのよ」

「うんうん」

帰り際、こなみとななみが拝殿の方を眺めて、懐かしむようにそういった。

昔は遊び場だった神社も、いつの間にか来なくなつたことに二人は気付いた。

「まさか、同じくらいの年の子がいたなんてねー」

「蓬莱でちあらに出会うまで気付かなかつたなんてねー」

「ひよつとしたら、小さい頃、一緒に遊んでたかもよ？」

「ん……」

どうだろうか。

ちあらの記憶は曖昧あいまいだった。

「願い事とかしたこともあつたっけ……」

「おねーちゃん、がらんがらん鳴らしてたわよねー。お賽銭も入れずに」

「あははー」

「大丈夫、それくらいで神様は怒ったりしない」

「だどいいけどね」

「じゃ、また明日ね」

「おやすみなさい」

大きく手を振って、二人は帰途に就いた。

急に神社が静かになる。

とは言えこなみ達が帰った方角には、大きな国道六号が横たわっており、ひっきりなしに車
が通っているのが見えるので、全くの無音ということは無いのだが。

「……………」

また記憶の混乱が起きている。

願い事とかしていた、という言葉に引っかかりを感じたのだ。

こなみは確かここで……。

だが、明確なことは思い出せない。

不思議なのは、こうして記憶の混乱があるにもかかわらず、ちあらのストレスにはなっていない
と言うことだ。記憶がごっちゃになったり、その所為で本当の記憶が解らなくなってしまう

うということもない。

自分が一六年間生きてきた記憶があり、それとは別に、断片的な記憶がある。それらはちゃんと分かれて記憶されていて、今までの自分の人生の記憶とは別に存在しているのだ。

「ふう……」

ちあらは天を仰ぎ見て、この別の断片的な記憶がどこから来たのかと思ひ巡らせた。

どこか別の世界の記憶なのだろうか？

自分が思い違いをしているのだろうか？

それとも勝手に作り出した記憶なのだろうか？

この星空のどこかに、この別の記憶を持つ自分がいたりするのだろうか？

ふと視線を落とすと、拝殿の前で一人の青年が祈っている姿が浮かんだ。

「おに……い……ちゃん……？」

自然と言葉が出てしまったが……しかし、誰であるか、やはり記憶は曖昧だった。

ただ、今までに見たことの無い記憶だった。

「あ……う……」

なんだかよく解らないが、自然と涙が出てくる。

何だろう。

何故だろう。

胸がじーんと熱くなって、得も言われぬ想いが、心の底からわき上がってくる。

ああ、あの人のそばへ行きたい。

そうも思った。

しかしこれは自分が見せている何らかの記憶であって、今そこに彼がいるわけではない。この不思議な記憶の正体を、どうすれば解るだろうか？

「ほむー！」

ちあらは急いで社務所の裏手に回ると、猫たちに餌をやった場所に来た。

茶色のブチ。

社務所から漏れる明かりに照らされて、その猫は満足そうに顔を洗っていた。

「茶ブチ、次の餌場をわたしに教えて」

ちあらはしゃがむと、茶色のブチの頭を撫でる。

するとその言葉を理解したのかどうか解らないが、茶色のブチは移動を開始した。

神社を出て、西に。

するとすぐ、ちあらが荷物を受け取った交番がある。

目の前は大河のように広い国道六号。

ひっきりなしに車が通ってはいるが、夜の二〇時も過ぎると、車が通らなくなる隙間も多くなる。

茶色のブチはひよいひよいと渡っていくが、ちあらは信号を待った。

信号を待っている間、ずーっと茶色のブチを目で追う。

しかし、国道六号を渡りきると、茶色のブチは路地に入ってしまった。

「う……」

ヤキモキする。

国道六号は大きな道路なので、なかなか信号が変わってくれない。

一分以上の時間が過ぎて、ようやく信号が青に変わった。

ちあらは巫女装束の裾を踏んでしまわないよう気をつけながらも、てててーと横断歩道を渡り、茶色のブチが消えていった路地の前まで来た。

路地を覗いても当然茶色のブチの姿はなく、ただ暗闇がずうっと続いていて、路地の抜けた先の明かりがぼんやりと見えるだけだった。

「……」

恐怖心はなかったが、さてどうしたものかとちあらは思案した。

このままこの中を進んでも、向こう側に抜けるだけである。

あ、いや、そもそも抜けた先なのかもしれない。

ちあらはそう思って、いったん路地を駆け抜けてみた。

いとも簡単に、向こう側に抜ける。

当然である。

しかし、茶色のブチの姿はない。

それも当たり前である。

他に猫はいないかと思って辺りを見渡すと、見たことのない黒猫がとことこやってきて、ちあらの脇わきをすり抜けると先ほどの路地へと入っていった。

「ふー！」

ちあらはそれをじーっと目で追う。

すると黒猫は路地の途中で消えてしまった。

ちあらは慌てて路地に飛び込むと、黒猫が消えた辺りで立ち止まった。すると、狭いが自転車が置けるちよつとしたスペースが路地から横に伸びていた。そして手前にはビルの入り口——いや、裏口か？——がある。

「から……くり……？」

鉄扉に網入りガラスがはまった古い扉に、『機巧屋』の文字があった。

お店だろうか？

会社の屋号だろうか？

ちあらはドアノブに手をかけると、ゆっくりとそれを回した。

金属がこすれるようなイヤな音を立てて鉄扉は開き、同時にカウベルの音が上の方から鳴る。

昭和時代のビルのなんともいえない古くさい香りが、ちあらの鼻をついた。この香りは旧校舎の化学実験室でするので、ちあらはなんだか学校に来てしまったかのような錯覚に陥る。

しかし、中はまったく想像と違っていた。

カウベルのあとにちあらを出迎えたのは、時計の音だった。

しかも一つや二つではない。

いくつもの時計の秒針が進む音。それらは同期がとれているわけではないので、バラバラに聞こえて、まるでエコーのように室内に充満していた。

「いらっしやいませぬ」

「……………」

そしてちあらを出迎えたのは、あの黒い猫とおぼしき丸いヤツだった。

「丸いヤツ、は余計ぬ」

「何も言っていない」

「ぬふふ」

『だれ？ お客？ 今手が離せないからテキストに相手しといて』

店の奥の方から、そんな声が聞こえてきた。

声から判断するに、子供ようだ。

「ここを自力で見つけるとは、なかなかぬ」

「猫のあとをつけてきた」

「なるほどぬ。吾と同じぬ」

「コク」

「で、何か用かぬ？ ここは万屋ぬ。よろずや 食べ物以外なら何でも揃そろってるぬ」

「万屋…」

「でも、一番買って欲しいのは、時計ぬ」

「高そう…」

「高いぬ」

「じゃ、ムリ」

「そうかぬ、残念ぬ」

「それよりも…」

ちあらは一呼吸入れると、勇気を出して言葉を続けた。

「わたしは、記憶を、取り戻しに、来た！」

声は小さいけれども、力強く、はつきりとちあらはこの丸いヤツに告げた。

「丸いヤツってなんぬ！」

「あなた」

「名前で呼ぶぬ！」

「わかった」

この丸いヤツの名前は、テトメト。この丸いヤツの名前は、テトメト。この丸いヤツの……。

「ぐぬぬ」

「もう一度言う、わたしの記憶を、取り戻しに、来た」

「そんなにすぐに結論を出していいのかぬ」

テトメトがずいどちあらの顔をのぞき込んでくる。

「取り戻すと、何か良くないことでもあるの？」

素直な疑問をぶつける。

「少なくとも、平和ではなくなるぬ」

するとテトメトはそう答えた。

「平和では、なくなる？」

「そうぬ。記憶を取り戻すことは、主が普通の人間ではなくなるといふことぬ」

「普通の人間では、なくなる……？」

鸚鵡わうむ返しに言葉を返すちあら。

しかしその言葉の意味は、イマイチわからない。

「わたしはかつて……」

いや、違う、「かつて」ではない。

何という言葉を使えば良いのか……。

「わたしには、人間には使えない、様々な力を使うことができた記憶がある」

浄化、万物の意志を読み取る、人の感情を読み取る。

記憶の中の自分は、そのようなことが出来るはずなのである。

そして思い出さなければならぬ人がいる。

自分を自分たらしめた、あの人を……。

「わたしには忘れてはいけない人がいる……！」

気がする。

「神社で必死に祈る姿を見たのかぬ？」

「！」

テトメトの言葉で、ちあらの脳裏に神社の前で必死に祈る男子の姿がフラッシュバックする。

「見た！」

ちあらのために祈ってくれた。

それは解る。

けれど、どうして祈ってくれたのかは、解らない。

「その記憶は、おそらくだけど、わざと留め置いたものぬ。本来の主には、その記憶はないはずぬ。あつてはいけないものだぬ」

「そう……じゃあ誰がわざと残したの？」

「だってぬ、黒翼様。誰が残したか、知りたいらしいぬ」

「やあやあ」

いつの間にかテトメトの隣には、小さな女の子がいた。

黒いゴスロリチックな衣装を着た、小さな女の子だ。だが、その目は子供のそれではないことは、ちあらにはすぐに解った。

テトメトの主である。飼主……と言っているかどうかは解らないが……。

それにしても、どこからやってきたのだろうか？

テトメトに意識を向けていたとは言え、部屋の奥から来たのであれば、解ったはずなのに。

「紅茶を入れた、まずは気持ち落ち着けるといい」

店の中にある小さなテーブルセットには、いつの間にか紅茶と洋菓子が用意されていた。アッサムの濃い香りが、ちあらの鼻をくすぐる。

「この紅茶はミルクがあうけど、香りが薄れるから今はストレートで飲むことをお勧めする」

小さな女の子は、その見た目とはかけ離れた口調で、ちあらをテーブルへと案内すると、紅茶と一緒に角砂糖だけをそばに置いた。もちろんテーブルの上にはミルク壺も置いてはある。

一緒に用意してあるお茶請けはショートケーキだった。

大きな苺が真っ白なクリームの上で、自己主張している。

ただ、晩御飯を食べたばかりだ。

ちあらは何となく自分のお腹を見た。もともとたくさん食べられるワケではないので、このケーキがすべて胃袋におさまるか自信がない。

「甘いものは別腹という」

「コ、コク……」

それはその通りだと思いつつも、ちあらは自信なさげに頷いた。

そして紅茶を一口いただく。

クセが強い紅茶ではあったけれど、なんと言おうか、すーっと気持ちは落ち着いたようなそんな気がした。

何よりも、温かい飲み物というのはホッとさせてくれるものだ。

「この世界では初めまして、月夜野ちあら。わたしの名前は『黒翼』、よろしく」

「くろ……は……」

「様をつけるのが、妥当だ」

どうやらこの目の前の女の子はかなりの傲岸不遜ごうがんふそんのようだ。しかしその態度が実に自然というか、イヤミではないというか、なんだか不思議な雰囲気ふしぎなふんいきを滲にじませている。

「さて、多くは語らない。なぜなら、あなたの中に残る記憶はあなた自身がその存在理由を見つけるべきだと思うから。だからその記憶については説明しない」

黒翼はそこで言葉を切ると、紅茶を一口。

いや、二口。

そのあとケーキを一口。

また紅茶を一口。

「……………」

ちあらは自分から何か話すべきなのか、それとも黒翼の次の言葉を待つべきなのか迷う。

「んー、やはりフオレストアのクリームはちよつとべたついて甘さがくどい……むう、浅草橋には美味しいケーキ屋がないのが欠点だ」

そして続きを言うのかと思えば、ケーキに文句を言っている。

ますますちあらはどうしたらいいものかと心の中で狼狽えた。

とりあえず自分もケーキをいただくことにする。

相変わらず時計の音は部屋のありとあらゆるところからしてくる。

そのリズムに囚とらわれるように、ちあらはぎくしゃくしながらケーキを口に運んだ。

甘みもまた、心をホッとさせる……が、晩御飯を食べたばかりなので、確かに胸に来る。黒翼がくどいと表現したのも頷ける味だ。

そんなちあらを見て、黒翼がまた目を細める。

「ちあらの中に眠る記憶だけ、それは四つの世界に跨またがっている」

「ふえ……」

思っていたことの遙か斜め上の答えに、ちあらはケーキの皿を落としそうになった。

「そして、今は、四つ目。くふくふ」

少女は悪戯いたずらっぽく笑って、ちあらの目を見つめた。心を見通すかのような視線。

「そして、この四つ目が最後。五つ目は、ない」

一つ目はこなみが歪ゆがめてしまった世界。

二つ目は不安定な命しか持たないちあらを、確固たる命を持つちあらにした世界。

三つ目はこなみが歪めてしまった世界だが、スーパーなちあらがいる世界。

そして四つ目が、今。

「他の世界はどうなったの？」

「わたしが消した。もともと生まれてはいけない世界だったから……んー、いや、一つはとても重要な世界ではあったかな。わたしにとっても、あなたにとっても」

こなみの願った世界を消し去るために、ちあらの力は必要だった。

そのちあらを不安定な存在から、確固たる個体にするための世界が必要だったのだ。そして、こなみとななみが鳥越多輝トリこえたきと出会わなかった今のこの世界は、こなみが願った神社には何の力も残っていない。

となるとこの黒翼の言う四つ目の世界には、ちあらは生まれなかったことになる。存在して

いないのが、正しいのである。

しかし、月夜野ちあらは存在している。

人間として、一六年分の記憶を持って。

「人一人の素材を都合するのは、わりと面倒くさい。ちよつとずつ、ちよつとずつ、世界に影響を与えない程度に色んなところからもらってくる」

本来は別の物質になっていたであろう分子を、世界の矛盾が生じないようにかき集め、一人の人間を構成する。と同時に、一六年間あの神社で暮らしてきたという事実を作り込み、世界に定着させる。

「つまり、あなたが、わたしを、創つくった？」

「そう、わたしのために」

「……」

「けれど強制はしない。月夜野ちあらはの人生は、月夜野ちあらなものだからね。わたしは月夜野ちあらが生まれるように世界を調整したけれど、その自由な意志を妨さまたげる権利はないから」

「自由な、意志……」

「あくまでも選ぶのは、月夜野ちあら。自分の意志で答えを選ぶといい」

「記憶を取り戻すか、記憶を消し去るか？」

「少し違うかな。わたしのような人と異なる道を歩むか、人の道を歩むか、が正しい」

「あなたと同じ道……」

「わたしと同じ道を選ぶなら、すべての記憶を取り戻してあげる。人の道を進むなら、その邪魔な記憶をすべて消してあげる」

「幸せなのは人の道ぬ。黒翼様と同じ道を進んで、幸せになるのはとても大変なことぬ」
そこへテトメトが割って入った。黒翼だけの情報では偏かたよっていると思うたのだろう。

「ということは、今、あなたは不幸？」

「あちらは黒翼に素直に問うた。」

「不幸に見える？ それとも幸福に見える？」

しかし黒翼はハッキリとは答えない。

「……不幸そうには見えない」

「クスクス、見かけによらないという言葉もある」

「じゃあ、テトメト、あなたは？ 幸せ？」

「吾かぬ？ 吾は黒翼様がいなければ、幸せ……んぎゃ!!」

黒翼の拳こぶしがテトメトの脳天に直撃していた。

「なるほど……」

「こいつの言うことは信用しなくて良い」

「大丈夫、なんとなくわかった」

「どうだか……」

「痛いぬりぬり。黒翼様はすぐ手が出るからちあらも気をつけた方が……ぎにやああ！」

今度は黒翼の正拳突きがテトメトの頬に突き刺さる。

「安心して、女は殴らない主義だから」

「殴られるくらいは、不幸のうちには入らない」

「くふふふ、言うね」

「この世界にわたしがいないのなら、わたしはいてもいなくても何も変わらないと思う。あなたがわたしに記憶の断片をくれたのなら……」

「その時の自分に戻りたい？」

「コクリ」

ちあらは深くうなづいた。

「その記憶のわたしの方が、ほんとうのわたしのような気がするから……」

今の人間のちあらは、黒翼によって創り出されたもの。

記憶の中のちあらこそが、ほんとうの自分。

「いつか、後悔はするよ？」

「幸せになれないから？」

「そう」

「もっと他に後悔することはありそう……」

幸せになれないことは、後悔することだろうか？

「くふふ、それはあるかもしれないね。けれど、あなたが言うように、能力を取り戻せば何かが変わる」

「コク」

「悪い方にも。良い方にも」

「コクコク」

「けれど、人として生きることまでできる」

「ダメ、この記憶は……消したらいけない」

「ちあらは首を左右に振った。」

「大事な記憶だから。」

「能力を取り戻せなくても、あの神社で祈る、あの人のことを忘れてはいけない。」

「フフ、決して会えないのにな」

「！」

「もう不幸ははじまつてるぬ」

「でも、忘れたら……」

「そうだね、何もかも無くなってしまふよりはいいのかもしれないね」

「コク」

「月夜野ちあら、すべての記憶は神社にしまっておいた」

「神社に？」

「戻ってごらん。あの神社に踏み入れたときから、あなたはすべてを取り戻す。そうそう、ちよっとしたサブライズも用意しといた」

「すべてを……取り戻す……」

「能力も、記憶もね」

「その時に、後悔する？」

「それはまだ早いかな」

「そう……」

「後悔のことばかり考えても意味がないぬ。この道は幸せになるのが難しいだけぬ。幸せにならないわけじゃないぬ」

「わかった………!!」

もはや引き返せない。

自分で選び取った道だ。

「さあ、神社に戻るといい」

黒翼は両手をあげて、高々と宣言した。

が……。

「あむ……ケーキ、食べてから……」

ちあらはケーキの皿をしっかりとつかんでいた。

「……」

「意外と現金ぬ」

呆れる一人と一匹だが、ちあらが洋菓子を食べるチャンスなどあまりない。

仕方がないことであった。

* * *

「いいのかぬ？」

残ったティーカップをお盆に片付けながら、テトメトは心配そうに黒翼にそう聞き返した。

「ちあらめ、最後までわたしを様付きで呼ばなかった」

黒翼はそんなことをブツブツ言いながら、口を尖らせていた。

「賢者の道は、茨の道ぬ。月夜野ちあらをその道に引きずり込んだ黒翼様の責任は大きいぬ」

テトメトは呆れながらも、諦めずに言葉を続けた。

「さあ、どうだろうね？」

すると黒翼はようやくテトメトの方に向き直ると、またほくそ笑んだ。

「まーたそうやってしらばつくれるのは良くないぬ」

「あの子はいつまでわたしのことを信じるかな……そう長くはないと思うけどね」

「どうということぬ？」

「月夜野ちあらは芯が強く純粹だから、そのうち気付くと思う」

「何に気付くぬ？」

「わたしが善人ではないってことに、かな」

「……自分でそれを言うかぬ」

「それでもわたしに従ってくる可能性も、零^{ゼロ}ではないけれど……どうかな」

黒翼はテトメトをチラ見する。

考えてみればこの黒猫は、黒翼の良いところも悪いところも見て、それでも黒翼のあとをついてきている。

ちあらにも、その可能性はあるかもしれない。

「月夜野ちあらがどうして能力を求めたかによると思うぬ」

テトメトはそんな黒翼の視線には気付かず、言葉を返した。

「ふむ、それは、本来の自分を取り戻すためじゃないかな。神社に囚われの身でありながら、その能力は決して小さくはなかった」

「けど寿命は数年しかなかったぬ」

「それを打ち破った者がいる」

「鳥越多輝かぬ」

「月夜野ちあらの心の底はわたしにも解らないけれど……うん、その辺が原点じゃないかな」
新しい世界にいても。

人のままでいても。

そこは本来、ちあらのいない世界だから。

少なくとも、自分がいた世界の自分でいたい。

「なんか結局は黒翼様がぜんぶ仕向けたような気がするぬ」

「おや、この世界に、月夜野ちあらはいなければいいってこと？」

「うぬぬ、そ、そういうわけではないぬ……」

「わたしだって無闇に月夜野ちあらを創ったわけじゃない。かつてあった世界に、あの子がいたから……」

そして黒翼は目を閉じて、ゆっくりとうなずく。

「そう、だからこの世界に引き上げた」

ずれてしまった世界に、たまたまあの子がいた。

その子はとても強い力を持っていた。

そして世界をマージするとき、あの子を消してしまうのは惜しいと思った。
だから……。

「うん、ただ、それだけ」

それから目を細めて、満足そうに笑うと、黒翼はそう付け加えた。

最後の言葉は、テトメトにもウソだとわかる。

そのほくそ笑んだ目。

瞳はかけらも笑っていない。

まだ何かあるんだろう。そしてそれはきっと面倒なことなんだろう。んでもって、さらに自分が後始末とかするに違いない。

などとはおくびにも出さず。

テトメトは黙ってもう冷めきったティーカップをお盆にのせて、部屋から出て行った。

四、こっちが基底クラス

神社に戻ってくると、交換したばかりの淡い光がちあらを出迎えた。

特にいつもと変わらない景色だったが、ちあらには違つて見えた。

かつては帰つて来るのもイヤだった、恐ろしい場所。

かつては自分を生み出した、場所。

そして今は、何の力もないただの神社である。

「ふ！」

自分はどうだろうか？

巫女、たりえるだろうか？

神、たりえるだろうか？

「ただいま」

参道へと踏み入ると、木々がざわめくのが聞こえる。

踏みしめた土からも、この社の地の息吹やしろが伝わってくる。

ちあらは何かを確信すると、おみくじの結んである場所に行つて、その一つに触れた。

結んだ人の思いが指先を伝わって、響いてくる。

そして負の思いにまどわりつこうとする、よからぬ小さな魍魎魎たちが見える。

「祓！」

みくじを通してちあらに寄ってきた小さな餓鬼ども、怨霊どもを祓う。

同時に結ばれていたおみくじに一気に炎がともり、その光がちあらをゆらゆらと照らした。

時には青く、時には紅くその身を焼き焦がし、浄化されていく。

そう、こうでなくては、巫女は務まらぬ。

ちあらはまるで自分の本当の身体を取り戻したような、そんなを感覚を味わった。これこそが自分だと。すでに失われた世界の記憶であったとしても、それらもまた月夜野ちあらに変わりはないのだから。

「ん……」

ちあらは振り返り、参道を見た。

そしてずーっと視線を移して、拝殿を眺める。

そこにはまだ一人の男子が祈っている。

月夜野ちあらのために。

消えゆく……いや、消えてしまった自分を、もう一度、取り戻すために。

ちあらはゆっくりと拝殿に向かって歩くと、彼が祈っていた辺りで立ち止まった。

そしてまるでそこに彼がいるかのように、その背中に抱きついた。

自然と涙が出た。

彼がいるから、今の自分がいる。

いろいろなことを思い出す。

絶対に忘れてはいけない、共に過ごした思い出。

その時間は決して長くはないけれども、とても暖かくて、心がドキドキして、そして幸せだった。愛する人がいつもいる。顔を上げれば、そこにいつも彼がいる。

ちあらは悟った。これ以上の幸せは、もう二度と来ないのだと。自分は人として生きることが捨ててしまったのだから。

黒翼が言うとおりに、これから先は幸せに過ごすことは出来ないのかもしれない。

「ありがとう、お兄ちゃん……」

ちあらはそう言うのと、立ち上がって、もう一度拝殿を見上げた。

今の世界の彼は、自分のことを知らない。

たぶん、ななみと一緒にいるんだろう。

嫉妬心は湧かなかった。

あの世界の彼と、今の世界の彼は違うのだから。

「わたしのお兄ちゃんは、あの世界のお兄ちゃんだけだから」

だから、絶対に忘れない。

ちあらがそう心に誓うと、拝殿の前で祈っていた彼の姿が消えていった。

いや、元からここに彼などいない。

ちあらの記憶が作り出した幻まぼろしなのだから。

それになによりも、自分がここにいることが、あの世界の彼がいた証拠なのだ。

「この命は、お兄ちゃんからもらったもの。お兄ちゃんは、わたしの中にいる」
もう幻はいらない。

これは月夜野ちあらの、正しい記憶なのである。

木々のざわめきが止まらない。

風がちあらを中心を落ち込むように渦巻く。

「ん……」

ちあらは拝殿の奥、本殿の中に何かを感じた。

そこは本来は依代いしろを置くところである。

そして今は何も無いはずだった。

ちあらは小走りで拝殿に近づくと、その中に入った。

真つ暗な拝殿を突き進み、本殿への扉を開く。

本殿へは簡易的な幣殿へいでんが設けられており、本殿に入るにはいくつもの扉を通っていかなければ

ばならない。

しかもそんなに頻繁ひんぱんに開け閉めすることは考えられていないためか、扉はものすごく重い。

「ふっ！」

背も小さくて体重も軽いちあらは、全体重を乗せるくらいの勢いで扉を引つ張る。

暗い拝殿の中で、重々しい木の軋きしむ音が響いた。

ほんやりとした薄明かりの本殿の中に、何かが立っているのが見えた。一瞬それは人なのかとちあらは思ったが、浮かび上がった形で、それが何かを理解した。

「これ……！」

ちあらはその影に近づくと、そつと手を伸ばした。

新品のすべすべな肌触りが心地よい。

それは、衣桁いこうにかけられた、見事な巫女装束であった。

誰も袖を通したことの無い、凜りんと張った布が神々しい。

「わたしが着ていたものと同じ……」

うつつらと影の中に見える袴の色は、紅色ではなく、深い緑色だった。

こんなもの、今までなかったのに……と思ったが、黒翼の言葉を思い出した。ちよつとしたサブライズ。すべての記憶と能力を取り戻したちあらのために、黒翼が用意してくれたものだろう。

そしてこの本殿に、依代としてちあらが着るべき巫女装束が用意してあるということは……。

「わたしに神になれと言うこと？」

ぼつんとちあらはそうつぶやくと、その巫女装束を、しっかと衣桁から下ろした。

EPILOGUE

うつすらと仄かな光の気配を感じて、ゆっくりと目を覚めました。鳥の声がどこともなく聞こえはじめ、朝を知覚する。

「ふ……っ……ん！」

布団の中で大きく伸びをする。ちよつとまだ氣息い感じ。

布団の暖かさが、とても恋しい。

三月。

目覚まし時計は、まだその役目を果たす前らしく、ただ静かに時を刻んでいた。

「ふ！」

元氣よく起きる。

昨日までとは違う日。

今日からは、ちあらにとつては新しい日が始まるのだ。

寒さと布団を押しわけ、力強く起きると、襦ぎの準備をする。

風呂場に神棚を飾り、注連縄をして、そして清めた水を張る。

脱衣所には衣桁にかけられた、新品の巫女装束。

朝日に照らされて、神々しくも見える。

今日は賽の目クラブにも、ぜひこの巫女装束で行こう、などと心の中で息巻く。

神になった自分を、こなみやななみ、桜織と十和子に見てもらうのだ。

「あ……」

と、思ったところであることに気付く。

「はうあー……」

このピカピカの巫女装束の袴の色は、緑なのである。そして来週の陸上部の応援には、ちらの巫女装束とは違う色の衣装にすると決まったではないか。

この世界では、ちあらはずっと紅の巫女装束だった。

緑の巫女装束では、チアの衣装と同じ色になってしまう。

でも、もう紅は着たくない……。

なぜなら、紅のちあらはこの世界にいないはずのちあらのものだから。

「むむむ……」

賽の目のみんなになんて話そう。

神になりました！

と言った所でみんなには何のこっちゃだろう。かつての世界の記憶など、知っている者は自

分だけである。緑を着ていくにしても、どうして緑にしたのかを説明するのは難しい。

「むむむむ……！」

やっぱり紅を着ていこうか……。

いやいや、緑じゃないと新しい自分になれない……。

「はっ！」

でも緑を着ていけば、自分が中心にならなくて済むかも……！

なんてことも思いついたり。

あっちうろろう、こっちうろろう、ちあらは脱衣所と浴室を何度も行ったり来たりして……。

「ほむー！」

でも、神がこれではいけないという思いに至る。

やはり緑を着ていこう。

今日から自分は生まれ変わったのだから。過去の自分とは決別したのだから。

意を決して襦ぎを済ませると、ピカピカの装束に袖を通す。

「うんむ！」

なんともしっとりくる肌触り。

まるで長年着こなしてきたような、そんな感触。

思い切って、外に出てみた。

朝日がちあらをまぶしく照らす。

その太陽を仰ぎ見る。

鳥たちのさえずり。

木々の囁き。

地霊の息吹。

すべてを感じ取ることが出来る。

かつて自分は、こんな朝を迎えていた。

ちあらは目を閉じ、この新しい朝を噛みしめる。

後悔は、いつやって来るだろうか？

不幸は、いつやって来るだろうか？

それは神となっても、解らない。

きつと黒翼でも、解らないだろう。

「けれど……わたしは、この道を選んだから……」

後悔しても、不幸になっても、自分にはそれを乗り越えられるだけの力がある。

「見えて、お兄ちゃん……！」

愛する人にいただいた、命。

後悔よりも不幸よりも大切なものが自分の身体には宿っている。

それだけで、ちあらは幸せを感じる事ができる。
見ると、猫たちがいつの間にかちあらを祝福するかのようになり、取り囲んでいた。